アラン・ダンダスの言語文化論

斎藤 武生
前神田外語大学言語科学研究科教授・筑波大学名誉教授

民俗資料の収集とその分類をめざす伝統的な民俗学に対し、アラン・ダンダスが主張したのは、すでに収集された民俗資料の分析および解釈の必要性であった。この課題に自ら意欲的な取り組んだことが、結果として、数多くのすぐれた業績を生み、新しい民俗学 (folkloristics) の構築に貢献することになった。本稿は、ダンダスのそうした研究のうち、言語表現が関係する民俗の議論を「民俗学者ダンダスの言語文化論」と呼び、その内容と問題点を見ようとするものである。

１．ダンダスの挑戦

英語の folklore という語は「民俗」と同時に「民俗学」の意味をもちあわせていて紛らわしい。「民俗学」の意味では folkloristics という表現を用いるのが今日では普通になっているようにみえるが、このことに大いに貢献したのがアラン・ダンダス (Alan Dundes) であった。そのダンダスが大学院の授業中に倒れ、その日のうちに亡くなるという衝撃的な出来事が起こったのは２００５年３月３０日のことである。

アラン・ダンダスはカリフォルニア大学バークレイ校の人類学・民俗学科の教授として幅広い研究活動を行ってきたが、

Scientific Approaches to Language, No. 11, March 2012, 123 – 136,
神田外語大学言語科学研究センター.

民俗学者としてのダンダスの最大の功績は、専門領域科学 (academic discipline) としての民俗学の確立に貢献したことであろう。２００１年には、民俗学分野の研究者としては初めて、アメリカ芸術科学アカデミー (American Academy of Arts and Sciences) の会員に選出されている。また、ダンダスは学生の教育にもとりわけ熱心であったといわれ、１９９４年には、卓越した教授者に与えられるカリフォルニア大学の Distinguished Teaching Award を受賞している。彼が学部で担当した民俗学入門の授業には教室に入りきれないほどの受講希望者があったという。

ダンダスの生前の研究は学界だけでなく、広く一般社会にもかなり知られていたようで、追悼記事の掲載は学会誌にとどまらず、New York Times, Washington Post, Los Angeles Times など一般紙にも及んでいる。それぞれの記事はかなりのスペースを割いて書かれているが、なかでも目を引くのは、ダンダスとともにインディアナ大学の Richard M. Dorson の下で民俗学を学び、その後カリフォルニア大学ロサンゼルス校 (UCLA) で教鞭をとった友人 Robert A. (Bob) Georges が執筆した記事である。彼がアメリカ西部民俗学会の機関誌に寄稿した "Alan Dundes (1934-2005): A Remembrance and an Appreciation" と題する追悼文は、家族ぐるみの付き合いがあったことにもふれていて親しみやすい。民俗学分野での訓練を受けながら、自分を民俗学者と名乗ることを潔しとしない傾向があるなかで、ダンダスは誇りを持って民俗学者を自称し、人からもそう呼ばれることを望んでいた、ということを紹介しているのもこの追悼記事である。

伝統的な民俗学者が、収集された民俗資料について、その民俗 (folklife, folkspeech) の起源、さらには、その民俗伝承の歴史を明らかにしようとするのに対し、ダンダスは民俗の存在について「なぜ」を問う試みに挑戦したのである。たと

えば、一定の形式と内容をそなえた民俗がなぜ存在するのか、また、ある種の民俗がときには普遍的に、ときには特定の文化圏にのみ存在することがあればそれはなぜなのか、といった問題をダンダスは問い続けたのである。やがてその答えをフロイト (Sigmund Freud) 流の精神分析に求めようとする精神分析的民俗学 (psychoanalytic folkloristics) の試みを行うようになる。たとえば、アメリカン・フットボールに性的な意味合いを読み取ろうとするダンダスの分析はその例である。これが、結果として、民俗学に直接かかわらない人たちの興味をも引きつけ、新聞紙上の追悼記事では、この種の研究内容が多く取り上げられることにもなった。

民俗には一見しただけではそれとわからない「隠された意味」があるとするダンダスのフロイト流精神分析は、新しい知見として、他の民俗学者を引きつけてもよいはずのものであった。しかし、民俗に性的な、あるいは、スカトロジカルな解釈を持ち込むダンダスの議論には一部の民俗学者の反発もあり、思ったほどの評価を受けるには至らなかったという。このことを指摘しているのも Georges である。さらに、彼はダンダスのもう一つの業績として、民俗の構造分析 (structural analysis) を指摘している。たとえば、ことわざ、迷信、ゲーム、なぞなぞ等の民俗の構造分析がそれで、すでに論文を世に送り出している。しかし、これも期待に反して、多くの民俗学者を引きつけることはなかったという。

ダンダスがめざしたのは、精神分析学的な手法による民俗の解釈 (interpretation) の試みであり、民俗の構造分析であったが、ともに民俗学界で十分に支持されることはなかったという事実は認めざるをえないであろう。その原因がどこにあったかが問題であるが、Georges はそのことにはふれず、ダンダスの研究は民俗学におけるパイオニア的、記念碑的な業績として永く残るであろう、と述べるにとどまっている。

ここで考えてみたいのは、ダンダスのように、幅広い研究活動を行った学者の業績を民俗学という一つの枠の中だけで評価しようとすることにそもそも無理があるのではないかという問題である。本人は民俗学者と自称することに誇りを感じていたとしても、評価となれば、話はまた別である。“folk”の再定義から始めて、アメリカの“folklife”および“folkspeech”を幅広く扱ったのがダンダスであるが、彼が常に強い関心を示していたのはことばの問題であり、議論の証拠に用いたのも多くは表現としての「ことば」であったという点に注意を向けることが必要であろう。

2．ことわざの構造分析

言語学の構造分析に関心を示した民俗学者は特にダンダスに限られるわけではない。たとえば、口頭伝承の一つに数えられるなぞなぞ (riddle) については、１９７６年にアメリカ民俗学会の機関誌 *Journal of American Folklore* の特集号が出ているが、そこには明らかに言語学の影響下で書かれたと思われる論文が収録されている（詳しくは斎藤 (1981) 参照）。ここでは、ダンダスのめざした共時的な視点に立つ構造分析というものがどんなものであったかをことわざ (proverb) の場合で見ておくことにしたい。

ダンダスがことわざの構造を問題にした論文は Dundes (1975) に収録されている。彼が「構造分析」ということでどんなことを考えていたのかは、次のような引用によってもある程度は推測できるであろう。

(1) a. The proverb may best be defined in structural terms.

b. Another reason for attempting a structural analysis of the proverb is that it would represent a valuable test case for the structural analysis of folklore generally.

c. The question is rather whether there are underlying patterns of "folkloristic structure" as opposed to "linguistic structure" which may be isolated.

d. My own approach to proverb structure assumes that there is a close relationship between proverb structure and riddle structure.

この論文におけるダンダスの主たるねらいは、構造分析によってことわざを特徴づける(characterize)ことにあったが、同時にそれは、民俗一般の構造分析のテストケースとなることを期待しての挑戦でもあった。また、ダンダスがことわざの特徴づけの問題に真剣に取り組むことになった背景には、Archer Taylor とか B.J. Whiting といったアメリカの著名なことわざの研究者たちが、ことわざの定義（definition）の問題にふれ、難しすぎるとして投げ出してしまったという過去の歴史があったことも忘れてはならないであろう。

ダンダスが採ったのは分類科学 (classificatory science) としての手法で、具体的には表層構造のパタンに基づいてことわざを特徴づける作業であった。たとえば等号 (A = B) の関係を含むことわざを "equational proverb" (e.g., Business is business. / Time is money.) と呼び、不等号 (A ≠ B) の関係を含むことわざを "oppositional proverb" (e.g., Two wrongs don't make a right. / One swallow does not make a summer.) と呼ぶことでことわざの構造分析を展開したのがその例である。その際、Zellig Harris 流の変換 (transformation) の概念を用いたり、アメリカのいわゆる構造主義言語学を特徴づける相補分布 (complementary distribution) の概念を利用したりしていることからも言語学の影響を読み取ることができる。相補分布を活用した議論に登場するのは "You can't have your cake and eat it too." といったことわざの類である。

ことわざの構造とメタファーの関係とか、ことわざの構造となぞなぞの構造の類似なども議論されていて興味深い内容を含んでいるが、伝統的な“folklore”としての民俗学の枠内にはとどまりにくい内容であったことは疑いない。それがまた“folkloristics”としての民俗学をめざすダンダスのねらいでもあったかと思われる。

民俗学研究の新しい方向を模索するダンダスの取り組みの一つが主として構造主義言語学の手法を借りた民俗の構造分析であったことを本節では見た。そしてさらに言うなら、ダンダスの試みは「分類科学」としての民俗の科学的研究の試みであったと言うことができよう。ただ、不運であったのは、２０世紀後半の（理論）言語学は分類科学を批判するかたちで説明科学 (explanatory science) へと大きく前進しつつあったことである。言語学が民俗学の拠りどころとはなりにくい状況がすでに生じていたことになる。

３．解釈学としての言語文化論

説明科学を志向する言語学はときに自然科学 (natural science) としての言語学を主張したりもするが、ダンダスの考える民俗学はあくまでも人文科学 (humanities) としての位置づけをもつもので、その試みは、特定の人々の民俗を説明するのに観察可能な証拠を基に行おうとする意欲的な取り組みである。ダンダス自身は、自分の研究を民俗の解釈の問題として進めようとしているが、本稿では、その研究のうち特にフォークスピーチに関係した研究を「民俗学者ダンダスの言語文化論」と呼び、具体的に見ていくことにしたい。

ダンダスのめざした言語文化論の具体例は彼の論文集 Dundes (1980) によって最もよく知ることができる。まず序文 (preface) では、従来の民俗学が民俗の分析よりは、民俗の収集と分類とにより多くのエネルギーを費やしてきたこと

を指摘し、これからの民俗学者は民俗の解釈に取り組まなければならないと主張している。そしてさらに、ダンダスが民俗の問題に興味をもつのは、そもそも民俗が人々の「文化を映す鏡」であるからであり、その民俗を分析することによって、やがては「文化の一般的な型」を見つけることもできるとしている。

最初に登場する論文は "Who Are The Folk?"と題するもので、そこでは、彼のめざす民俗学で問題にする folk（人びと；常民）とは次のようなものであるとし、さらに、必要な説明を補足している。従来の概念を修正する試みである。

(2) The term 'folk' can refer to *any group of people whatsoever* who share at least one common factor.

その後に１２編の論文が収録され、最後を飾るのは"The Hero Pattern and the Life of Jesus" である。フットボールの性的な解釈を扱った論文なども本書には含まれている。いずれの論文もそれなりに興味深いものではあるが、ここでは、ダンダスの言語文化論を特徴づけると思われる次の三つの論文に目を向けることにしたい。

(3) a. "Thinking Ahead: A Folkloristic Reflection of the Future Orientation in American Worldview" (1969)
b. "Seeing Is Believing" (1972)
c. "The Number Three in American Culture" (1968)

三つの論文は１９６８年から１９７２年までの４年間に発表されたもので、(3a) はアメリカ人の未来志向性(future orientation)を主として言語表現を証拠に論じたもの、(3b) はアメリカ人の物の見方・考え方が視覚重視であることをことわざ、成句など数多くの言語表現を証拠に主張したもの、(3c) はアメリカの文化を特徴づけるものとして「三の概念」の重

要性を主張したもので、それを裏づける数多くの慣用表現などを取り上げている。いずれもすぐれた言語文化論の例と考えられるが、少し気になるのは、これら三つの論文が短い期間に集中して発表され、その後はこの種の論文が書かれていないと思われることである。

関連して想起されるのは、カリフォルニア大学の卒業生に対してダンダスが行った講演（２００２年５月１７日）の記録である。２００２年という年が記念すべき特別な年、つまり、前から読んでも、後ろから読んでも同じになる回文配列の年 (palindromic year) であることを指摘したあと、ジョーク教授 (Joke Professor) の名で呼ばれるダンダスにふさわしい講演を行うが、話題の中心となったのはアメリカ人の世界観 (worldview) を特徴づける「三の文化」の話であり、そして「未来思考」の話であった。 裏づけとなる豊富な用例を引いての講演内容からは教育者としてのダンダスの情熱・熱気といったものも伝わってくる。 ただ、少し残念なのは、(3a) や (3c) の論文が書かれた頃から３０数年を経過しているにもかかわらず、言語文化論の話題に特に新しい進展が見られないことである。そして、さらに言うなら、(3b) の話が抜け落ちていることも気になるところである。

４．３つの言語文化論の試み

これまで、民俗学者としてのダンダスが伝統的な民俗学の枠を超え、いろいろと新しい試みに挑戦してきたことを見たが、彼が亡くなって７年を経過した今、それを引き継ぐ研究者がアメリカでどのようなかたちで育ってきているかが問題である。民俗学以外の、たとえば言語人類学 (linguistic anthropology) のような学際的研究分野に彼の業績が引き継がれるということはあってもよさそうに思えるが、はっきりしたことはわからない。

ここではダンダスの言語文化論として取り上げた (3a), (3b), (3c) の論文についてその主張、問題点などを簡単に見ておくことにしたい。

まず最初に (3a) を見ることにしよう。この論文は、民俗資料、とりわけ、日常生活で使われる言語表現を手がかりにしてアメリカ人の未来志向性を主張した論文である。アメリカ人が概して未来志向的で、未来を楽観的に考える傾向にあることは直感的にも理解できるが、これを証拠に基づく一つの事実として一般化して述べるのはまた別の問題である。

証拠となる表現として、たとえば、人と会ったときのインフォーマルな挨拶表現を比べてみれば、未来志向的な "How are things going?" の方が過去志向的な "How have you been?" よりアメリカ人好みであるという。文法的に言えば、前者の文の現在進行形には未来時が含意されるのに対し、後者の文の現在完了形には過去時が含意されることから、未来志向と過去志向の違いを英語の文法がしっかりと支えていることにもなる。妊娠しているアメリカの女性が "(I'm) expecting." と言ったりするのも、未来志向を裏づけ例の一つである。別れ際に "See you tomorrow." とか単に "See you." といった表現をアメリカ人が好んで使うのも未来志向の表れだとするのがダンダスである。未来だけは変えられるとする楽観的な見方もこうした未来志向と連動している。有名なハリウッド映画に登場する "Tomorrow is another day." もアメリカ人の志向性に合致したことわざであったことがわかる。

(3b) の論文のタイトルに使われた "Seeing is believing." ということわざは、例の E.D. Hirsch, Jr. などが、アメリカ人なら教養として当然知っていなければならないとしたことわざの一つで、これがアメリカ人の視覚重視の文化を特徴づけているというのがダンダスである。ただし、視覚重視がアメリカ人だけに限られるわけではない、ということもダンダス

は認めている。例によってダンダスは、この論文でも、多くの日常表現からアメリカ人の視覚重視を裏づけようとしているが、(3a) や (3c) の場合ほどの迫力は感じられない。問題点の一つは、このことわざはおそらく "Seeing's believing, but feeling's the truth." の後半部をアメリカ人が削除してしまったのであろう、とダンダスが述べている点である。つまり、本来は視覚より触覚を重視していたはずのことわざを視覚重視の文化をもつアメリカ人が後半部を削除することで逆転させてしまった、と推測しているわけである。しかし、この見方には多少問題が残る。たとえば、Nigel Rees の *Phrases and Sayings* (1995) は "Seeing is believing" の項目で 次のような説明をしているからである。

(4) A modern addition to the proverb --by 1879 -- is ... **but feeling is the truth.**

but 以下の後半部はもともとなかったもので、１９世紀の終わりごろまでに新しく付け加えられ部分だという説明である。似たような説明はほかでもみられる。また、Marshall McLuhan が次のことわざの存在を指摘しているのも気になるところである。

(5) Seeing is believing, but touching is God's own truth.

「削除」という言い方がどの程度まで適切なのかはっきりしないが、少なくとも、今日のアメリカで実際に使われているとされる 15,000 ほどのことわざを収録した *A Dictionary of American Proverbs* (1992: OUP) には後半部を含んだものは載っていない。この辞典は、Margaret Bryant が１９４５年にアメリカの方言学会および民俗学会に呼びかけ、アメリカ国内で実際に使われていることわざを収集したもので、半世紀近くの年月を経て１９９２年にようやく完成した労作である。

出版時には、ことわざ研究の第一人者として知られるWolfgang Mieder が編集作業の中心的役割を果たしているが、彼もまた、ダンダスに似て、「アメリカ人のことわざ」に執着した研究者の一人である。それだけに、視覚重視の議論で、ダンダスが "A picture is worth a thousand words." ということわざを見落としたことがとりわけ残念であったようだ。

このように見てくると、アメリカの文化を視覚重視という視点から特徴づけようとするダンダスの議論には、まだ問題が残されていることがわかる。この残された課題の解決を民俗学者に求めるのがむずかしいというなら、ダンダスの議論の根底にある英語という言語の表現そのものに立ち返り、そこから新たな言語文化論をめざすのが得策であろう。たとえば、Eric Partridge が２０世紀中頃に指摘した英語のクリシェイの一つに can't believe one's (own) eyes（自分の目が信じられない）があるが、この表現からは、英語圏の人たちが（自分の目で）見ること、見たことにかなり懐疑的であることが読み取れるであろう。つまり、自分の目で見たことがそのまま真実 (God's own truth) であるわけではない、ということをこのクリシェイは表現しているからである。また、さらに一歩進め、上記のクリシェイを日本語の場合に置き換えて考えてみるのもおもしろいであろう。対応する成句は「(自分の)目を疑う」という表現である。英語の can't believe と日本語の「疑う」とでは発想に大きな違いがある。こうした観察を出発点にして、日本語と英語が支える民俗の問題を（比較）言語文化論として展開するのが一つの方法である。

(3c) の「三の文化」論は、(3a) の「未来志向」の議論とならんで、ダンダスが得意とする話題であったようで、例の講演でも早い段階からこの話題を取り上げている。アメリカ人の好む３分割方式 (tripartite formula) というものを数多くの例で説明しているが、ここでは少しだけ例を見よう。

(6) knife, fork, spoon; yesterday, today, tomorrow; B.A., M.A., Ph. D ; good, better, best; animal, vegetable, mineral ; solid, liquid, gas ; the humanities, the social sciences, the natural sciences

(6) の例はいずれも講演のなかで引かれた例であるが、(3c) の論文では次のような例が用いられている。

(7) a. PTA, FBI, VIP, DNA, UFO
b. the government of the people, by the people, and for the people
c. ..... tell the truth, the whole truth, and nothing but the truth
d. Faster than a speeding bullet, more powerful than a locomotive, able to leap tall building at a single bound.
e. It's a bird! It's a plane! It's Superman!

ダンダスの「三の文化」論は、アメリカ人の世界観を解き明かそうとして書かれたものである。いろいろと問題はあると思われるが、「三のスポーツ」ともいうべき野球が盛んな国だけに、ある種の説得力をもった試みであったことは否定できないであろう。彼のここでの議論に「言語文化論」という言い方を持ち出すのは必ずしも適切ではないが、日本人の言語生活で「三」の世界を覗いてみると、明らかに言語文化の世界がすぐそこにあることがわかる。(8) の例を見てみよう。

(8) a. 三日坊主、三日天下、三文判、三羽烏、三拍子
b. 仏の顔も三度、早起きは三文の得、三人寄れば文殊の知恵

漢数字の「三」を持つ日本語の問題であり、日本文化の問題である。

５．おわりに

民俗の収集と分類をめざす伝統的な民俗学の枠を超え、新しい民俗学の試みに挑戦したダンダスの研究を見てきたが、筆者が「ダンダスの言語文化論」として特に注目したのがDundes (1980) に収録された三つの論文であった。いずれもアメリカの民俗とか文化をアメリカ独自のものとして特徴づけようとするねらいをもつもので、そこにある程度の無理が伴うのは避けがたいことであった。これがもし仮にイギリスを含めた「英語文化論」としての議論であったなら、当然、違ったものになっていたであろうが、ダンダスのねらいは初めからそこにはなく、アメリカという新しい国の特異な体験がその民俗にどう写し取られているかを見ることにあったと思われる。こうした彼の研究を「新アメリカ研究 (New American Studies) 」の一つとする見方もあるが、民俗学者としてのダンダスの立場からするなら、大事なのは「アメリカ民俗 (American folklore) 」であって、「アメリカにおける民俗 (folklore in America) 」ではなかったということであろう。

すでにふれたように、 Richard M. Dorson はダンダスのインディアナ大学時代の恩師であった。そして、アメリカの伝統的な民俗学界のリーダーでもあり、Studies in Folklore という民俗学関係の研究書のシリーズでは編集主幹をつとめている。そのシリーズの２冊目として出版されたのが Dundes (1975) であった。Dorson はこの本の前書き (foreword) を執筆しているので、ダンダスの新しい挑戦については早くから承知していたはずであるが、彼が「アメリカ民俗」と「アメリカにおける民俗」の違いを問題とする論文を書き、「アメリカ民俗」の研究の必要性を強く主張したのは１９７８年になってからのことであった

参考文献

Dorson, Richard M. 1978. "American folklore vs. folklore in America." *Journal of the Folklore Institute* 15, pp.97-111.

Dundes, Alan. 1975. "On the structure of the proverb." *Analytic Essays in Folklore*. Mouton: The Hague. pp.103-118.

------- 1980. *Interpreting Folklore*. Indiana University Press: Bloomington.

斎藤 武生 1981. 「アメリカの謎について」『言語文化論集』（筑波大学）pp.1-31.

261-0014
千葉県千葉市美浜区若葉 1-4-1
神田外語大学
言語科学研究科

saito-t@kanda.kuis.ac.jp